

島根の地域医療

第68号

2019/4/20

SHIMANE
AKAHIGE
BANK



発行者 島根県健康福祉部
医療政策課医師確保対策室

今回の紙面

- ◆地域医療最前線 NO.73 《高梨医院 院長 高梨 俊夫》
- ◆看護師さんのページ NO.53 《社会医療法人仁寿会 訪問看護ステーションかわもと 管理者 竹川 由美 H30年新卒看護師 廣澤 有香》
- ◆研修医のページ NO.56 《島根県立中央病院 研修医 金築 駿吾》
- ◆信頼され必要とされる病院薬剤師を目指して 《益田赤十字病院 薬剤部 薬剤副部長 郷原 学》
- ◆医療政策課からのお知らせ

地域医療 最前線

No.73

隠岐の島での開業32年

高梨医院 院長 高梨 俊夫



田舎の
開業医は
忙しい。
朝から晩
までの一般
外来診療、
昼休憩を
使つての訪問診療、各種検診、子ども
の予防接種（集団）、老人ホーム
の回診、学校や保育所の検診、また
行政主催の各種委員会への出席、更
に夜は定期的な病院勤務医との合同
の勉強会とやることはいくらでもあ
る。

32年前に開業した当時は島内に9人いた開業医も高齢で亡くなったり閉院したりで、今では若い（？）3人になった。その一番の若手が今年古希を迎える私である。島の人口も2万人弱から減少し続け、今では1万4,000人を切るまでになった。65歳以上が40%を超える典型的な少子高齢化社会である。

そんな離島で30年以上も診療を続けられたのはなぜ？と思われるかもしれない。それは、島の生活は都

会暮らしとは違って、何につけても濃いからではなからうか。豊かな自然との付き合いは勿論のこと、人のあるいは地域との関係も都会よりも濃密のような気がする。またすべてにおいてコンパクトである。小さな島であるから一番遠くまで行くにしても車さえあれば30分もかからない。買い物でも郵便局でも銀行でも文化会館でも図書館でもプールでも運動場でも海水浴場でもすぐそこである。学校や保育園もわかり。しかも大都会へもある意味近いのだ。飛行機を使えば私の家から伊丹空港まで正味50分、羽田空港でも3時間あれば着いてしまう。



幸い5人の子どもに恵まれた。4人は本土に生まれる時に生まれ、1人は島で生まれた。5人とも中学校まで

はこの島で大きくさせてもらった。田舎の教育は都会よりも一人一人に優しいかもしれない。中学校卒業後3人の娘は松江の高校へ、2人の息子はそのまま隠岐の高校に通った。みんな隠岐が好きであり、今でも盆暮れには遠くからでも懐かしそうに孫を連れて里帰りしてくる。



私が言いたいのは、若い子連れの医師でも隠岐での自然豊かな生活を一家で楽しめるし、医師としての力も島で十分に発揮出来るということである。学会や遊びで本土に出かける時には他の先生にお願いすれば特に問題はない。根っからの遊び人の私は、本土でしか出来ないことも、回りの同僚のお蔭でいろいろやらせてもらっている。（スキー、ゴルフ、マラソン、海外旅行、山登り等）離島では何も出来ないのではないことを強調したい。

医学部実習生のお世話も手伝わせてもらっているが、必ず一晩は美味しいものを食べながら、そしてお酒を飲みながら島の魅力を宣伝している。その成果のほどは知らないが、みなさん、一度遊びに来ませんか？

社会医療法人仁寿会
訪問看護ステーションかわもと

管理者 竹川 由美
H 30年新卒看護師 廣澤 有香



竹川管理者：左上 廣澤看護師：前列右から二人目

訪問看護ステーションかわもとは、平成9年5月に開業し、中山間地域の川本町を拠点に看護師6名と理学療法士1名により、24時間体制でサービスを提供しています。今後、医療技術の進歩や平均在院日数

の短縮化により、益々在宅で医療ケアを受ける療養者の増加が見込まれます。高まる訪問看護の需要に対し、訪問看護ステーションは全国的に人材不足が慢性化していると言われています。もちろん、当ステーションも例外ではなく、職員の高齢化や人材の確保という課題に直面しています。そこで昨年度、新たな取組みとして新卒看護師を配属してもらいたい、育成することにしました。

従来、当ステーションでは、ある程度の経験を積んだ即戦力となる看護師が配属されてきましたが、今回、新卒看護師を配属してもらうにあたり、じっくりと腰を据えて育成することに着実に成長していただくことを念頭に置き、育成期間を3年間と設定しました。まず1年目は、看護を好きになってもらうこと、住民の生活を肌で感じてもらうこと、笑顔で訪問から帰られることなどを目標とし、2年目以降に看護技術の習得やアセスメント等ができることとしました。そして何よりも重要視したのは、不安・疑問に思ったことがいつでもだれにでも相談できる職場環境を構築することでした。

新卒看護師の廣澤さんは、訪問を通して、疾患を持つ患者さんの生活は入院前と退院後では変わる場合が多く、退院後は新たな生活様式を

確立することが求められること、利用者の希望は治療ではなく生活を営むことが主軸であり、「生活の中の医療」を望んでいることなどを学ぶとともに、健康管理という看護の視点に興味を持ちました。

また、心の変化として、採用当初は同期入職の看護師と比べて技術習得が遅れていること、自分に何ができるのか、疾患や患者の状態をアセスメントする力がついているのかといったことが自己評価できず悩むことがありました。しかし、病棟での技術研修を経て、技術は少しずつ習得していけるものであること、それよりも在宅では、相手に受け入れてもらうことが、技術の習得よりも大切な第一歩であることを知り、なかでも挨拶や声掛けといったコミュニケーションが最も必要なスキルであることを学びました。

訪問看護は、継続して訪問することで利用者の状態把握を行います。利用者にもまた訪問して欲しいと感じてもらえるよう、訪問看護師は利用者のニーズを捉え、各家庭の状況に合わせたケアを行うことが大切です。一人の利用者とじっくり向き合える訪問看護は、看護の本質を学ばせてくれるものではないかと思えます。今後も訪問看護師として地域の皆さん、利用者さん、ご家族さんの思いに寄り添い、笑顔で元気に訪問したいと思えます。

【二年を振り返って】

皆さん、こんにちは。私は平成30年4月に新卒採用され、当ステーションへ配属された廣澤有香と申します。この仕事についた当初は、本当に一人で訪問看護ができるようになるだろうか大きな不安がありました。先輩看護師の訪問に同行させていただくことにより、利用者さんが訪問看護を利用される目的やご自宅に何う際のマナー、利用者さんのどういったことを観察すべきかなどを学び、単独訪問の準備をすることができました。



その後、いよいよ始まった単独訪問では、慣れないながらも利用者さんの気持ちに寄り添うことを心がけ、先輩看護師にフォローをしても

らいながら、利用者さんのケアをすることができました。単独で訪問すると自身の「できる部分」と「できない部分」が明確になるので、そのつど課題をみつめて対策を考え、実践をしていきました。できることが増えると少しずつ自信もつきますし、利用者さんと一対一で向き合える訪問看護は自身の成長をより実感できるように思います。

4月からは2年目がスタートします。看護技術の習得など覚えることはたくさんありますが、これからも初心を忘れず、利用者さんの気持ちに寄り添える訪問看護師を目指したいと思います。

研修医のページ No.56

島根県立中央病院

研修医

金築 駿吾



皆様こんにちは。
私は島根県立中央病院で初期臨床研修医をしております。

す金築駿吾と申します。この度はこのような貴重な場をお借りして、平成30年度から島根県の研修医が一丸となって始めた企画である「島

レジプロジェクト」について、ご紹介させていただきます。

「島レジプロジェクト」とは、島根県内の研修医がネット会議を用いてウェブ上で一堂に会し、様々な企画を行うことを目的として結成されたグループのことです。ご存知の通り、島根県は東西に長い県で離島もあり、研修医も各地の病院に散らばっています。ネット会議を用い



ることで、そうした距離や時間的制約を解決しながら、リアルタイムでつながることができそうです。

既に多くの勉強会や講演会などを行っており、研修医同士で自分たちが経験したこと、知っていることを共有するだけでなく、講師の先生をお招きして、各分野のスペシャリストの考え方をご教授いただいています。講師の先生についても、県内の先生だけでなく関西や関東、北海道の著名な先生をネット会議にお招きし、ご講演いただいたこともあります。普段は様々な制約のためお会いできない県外の先生方とお話ができるのも、ネットワークを用いたこの企画のメリットだと考えています。

企画を始めるにあたり、苦労することも多々ありました。前例もなく、機材やネットワーク環境も整っていない状況のため、まさに0（ゼロ）からのスタートでした。実は「島レジプロジェクト」の正式名称は「島レジプロジェクトチームZERO」という名前です。0から始まる企画であり、この企画が0という文字のように切れることのない円（縁）を結んでくれると信じ、この名前をつけました。

実際の企画・運営も私達研修医で行うのですが、皆忙しい業務の間をやりくりしながら協力してくれました。しかし、そうした苦労を共

に乗り越えてきた仲だからこそ、強い繋がりをつくることができました。勉強会や講演を聴く以上に、とても貴重なものを築くことができましたと感じています。

今年度は後輩を加え、さらに規模を拡大させた「島レジプロジェクト」がスタートします。皆が参加してよかったと思えるような企画を、今後も考えていきたいと思っています。

信頼され 必要とされる 病院薬剤師を目指して

益田赤十字病院 薬剤部

薬剤副部長

郷原 学



当院は県内で最も西にある益田圏域の中心的病院であり、高度急性期・

急性期医療の役割を担っています。また赤十字病院として災害救護にも力を入れており、災害発生時には薬剤師もDMAT・赤十字救護班のメンバーとして積極的に救護活動を行っています。

病院における薬剤師の役割は、

医薬品の購入・管理・供給・調剤業務に加え、薬剤に関する専門的な知識や技術を活かし、多職種と連携した患者・家族への服薬支援、また他の医療機関・地域保険薬局の薬剤師との連携も重要になっています。島根県内の病院薬剤師は慢性的に不足している状況であり、その中でも特に県西部の病院薬剤師不足は深刻な状況です。現在、当院は薬剤師12名と事務補助員4名の限られた人員で（将来我々と志を同じくする薬剤師が入社されることを願い）、全入院患者への完全服薬支援実施を目標に掲げて、一致団結して活動しています。また医師・看護師・栄養士・臨床検査技師などのメンバーと共に我々薬剤師も感染制御チーム、栄養サポートチームをはじめとする医療チームの一員として活動しています。最近では医師と薬剤師が中心となりポリファーマシーチームを立ち上げ、積極的に活動しています。

当院の薬剤部の特徴は、医師（特に研修医）、認定看護師が気軽に薬剤部に訪れて、患者への薬物療法について薬剤師に相談してもらえることです。以前、本紙の「研修医のページ」に登場された都野公一先生、稲本隼佑先生、原田愛子先生、秋好瑞希先生をはじめ、現在も多くの医師・研修医の方からたくさんのご意見を学ばせていただいております。

地域の方々がこの益田の地にしながら最高の医療を受けていただく環境を整えることが当院の責務であり、我々薬剤師

もその一翼を担っていると考えています。そのためにも継続して専門・認定薬剤師を育成した上で、高度薬学的管理が必要な部署（手術室、血液浄化センター等）や入院支援センターへの薬剤師配置、薬剤師外来開設などを目標としています。これからも患者・家族の方をはじめ地域の方からの声に耳を傾け、常に信頼され必要とされる病院薬剤師を目指すとともに、薬剤部職員一同も全力で地域医療を支えていこうと考えておりますので、今後とも益田赤十字病院薬剤部をよろしくお願い致します。



予告

第30回日本医学会総会に出展します！

4月26日～28日に名古屋市で開催される第30回日本医学会総会に、「島根県赤ひげバンク」のブースを出展します。

全国からお集まりの先生方に、しまねの魅力や赤ひげバンクの充実した支援体制などをご紹介します予定です。

皆さまのお近くにお席予定の先生がおられましたら、赤ひげバンク出展のことをご紹介いただければ幸いです。

会期中は、赤ひげバンク事務局の職員（右写真）がおりますので、お気軽にお声がけください。皆様のご来訪をお待ちしています！



赤ひげバンク事務局（島根県医療政策課医師確保対策室）職員

会 期：4月26日（金）～28日（日）

場 所：ポートメッセなごや（名古屋市国際展示場 第2展示館）

ブース：「島根県赤ひげバンク」（小間番号：3）

